短 報

子宮腔部細胞診にてエストロゲン活性を疑わせた
老年婦人の巨大卵巣嚢腫香川医科大学母子科¹⁾, 香川県ガン予防協会²⁾, 社会保険栗林病院³⁾半藤 保¹⁾ 藤田 純子²⁾ 脇 睦恵²⁾ 斉藤 央³⁾

I. はじめに

従来ホルモン活性がないと考えられてきた良性あるいは悪性の卵巣腫瘍でも、ときにホルモン活性を示す場合のあることが報告されている¹⁻⁴⁾。しかし、子宮頸癌検診で採取した子宮腔部擦過細胞診を端緒にこのような腫瘍を発見したという報告は多くない⁴⁾。貴重な症例と考えられたので以下に報告する。

II. 症 例

78歳主婦。8妊7産。閉経44歳。既往歴、家族歴に特記すべきことはない。自覚症状はないが、昭和62年7月6日検診車による頸癌検診を受診した。内診を行われることなく、綿棒による子宮腔部擦過細胞診の検査を受け、クラスIIと判定されたが、エストロゲン活性を示す細胞診所見(写真1)が認められた。Maturation Index (MI) 0/80/20, Eosinophilic Index (EI) 32%で、デーデルライン桿菌陽性、白血球はわずかであったためホルモン産生性卵巣腫瘍の疑いがもたれた。昭和62年8月、患者は栗林病院産婦人科を受診した。内診、超音波断層診断法にて左卵巣に小児頭大、23.8×20.6 cmの嚢胞性腫瘍を認めた。

A case of giant ovarian cystadenoma with high estrogenic activity detected through cervical cytology in a postmenopausal woman

Tamotsu HANDO¹⁾, M.D., F.I.A.C., Sumiko FUJITA²⁾, C.T., I.A.C., Mutsue WAKI²⁾, M.T., Hiroshi SAITOH³⁾, M.D.

¹⁾Department of Perinato-Gynecology, Kagawa Medical School

²⁾Kagawa Prefecture Association of Cancer Prevention

³⁾Ritsurin Hospital

論文印刷請求先 ☎ 761-07 香川県木田郡三木町大字池戸1750の1 香川医科大学母子科 半藤 保

平成元年4月14日受付

平成2年1月26日受理

入院時検査所見：血中CEA 2.4 ng/ml, AFP 4.7 ng/ml, CA 125 32 U/ml, SCC 0.9 ng/mlといずれも正常範囲の値を示したが、血中estradiol (E₂) 72.2 pg/ml, 尿中総エストロゲン 18.7 μg/日と性成熟期婦人の卵胞期の値、ないしそれ以上の高値を示した。ただし肝機能検査および一般検血成績に異常はなかった。

手術所見：昭和62年9月21日手術施行。淡褐色、透明な嚢腫内容液2,800 mlを吸引排除したのち、一部に小多房室を伴った縮小せる50 gの左卵巣嚢腫を摘出した(写真2)。

病理組織診断：漿液性嚢胞腺腫で、一部にムチン性嚢胞腺腫を合併していたが、悪性変化は全く認めなかった。

術後検査所見：術後4.5ヵ月目に測定した血中E₂ 18.5 pg/ml, 同時採取の子宮腔部スミアのMI 100/0/0と典型的萎縮型であった。術後2年3ヵ月の現在、患者は健在で特記すべき異常を認めていない。

写真1 卵巣腫瘍摘出前の子宮頸部擦過細胞診。エストロゲン活性を疑わせる

写真2 摘出した左卵巣嚢腫, 10%ホルマリン固定後

III. 考 察

いわゆる非機能性卵巣腫瘍で内分泌活性を示す症例の hormone cytology の報告は少ない⁴⁾。しかし、本症例のように年齢から当然細胞診が萎縮像を示すべきなのに、背景がきれいで高い EI, 右方移動の MI を示すスミアをみれば, hormone cytology に少し関心をもつ検者であれば, 容易にホルモン活性の異常に気付くはずである。従来報告は少ないものの, 実際上このような症例はもっと多いと考えられる。

今回の症例は, 腫瘍の大部分が漿液性嚢腫であった

が, 一部にムチン性嚢腫を混じていた。そのどちらがエストロゲン活性に主役を演じていたか不明であるが, ムチン性嚢腫部分に stromal condensation³⁾ を認めた。

なお, hormone cytology に際しては, 通常腔側壁 1/3 のあたりから細胞採取を行い, 鏡検上白血球はほとんど認めず, 頸管内膜細胞は混入せず, 3 個以上の細胞塊は除外して算定するなどの条件はあるが, 閉経後数年以上経過した老年婦人では, 集検用の子宮腔部擦過細胞診でもエストロゲン活性について, およその見当をつけうることを本症例は教えてくれた。

文 献

- 1) 藤村保文・他: ホルモン産生腫瘍を疑わせた閉経後婦人卵巣ムチン性嚢胞腺癌の 1 例, 日臨細誌, 25: 157~182, 1986.
- 2) 目崎 登・他: ホルモン産生腫瘍を疑わせた閉経後婦人巨大卵巣嚢腫の 1 例, 日産婦誌, 34: 115~118, 1982.
- 3) 小幡憲郎・他: 閉経後婦人に発生した上皮性卵巣腫瘍の病理組織学的, 内分泌学的研究, 日産婦誌, 38: 647~656, 1986.
- 4) Vesterinen, E., Putora, E. and Wahlstrom, T.: Oestrogenic activity associated with ovarian cystadenoma after the menopause, Ann. Chirurg. Gynecol., 67: 109~114, 1978.